

2 建部綾足『折々草』

単語の知識があればあるほど、読解と答案は正確になっていく

●印の単語（鍵になる語）の正確な意味を記せ。

●ふりしく

●かまへて

●めぐみ↓めぐむ

●くえおつる↓くゆ／おつ

●かしこき↓かしこし

●やどり

●まだき

●黄泉（よみ）

●いくたり

●参らす（まゐらす）

●いぶせき↓いぶせし

●たうべ↓たうぶ

●かまへ

●さすがに

●はまむ↓はむ／む

●いざよふ

●のどけく↓のどけし

問3 傍線部Ⅰについて、そのようにする理由を簡潔に述べよ。

〔参照箇所〕「さるかしこき事をききしる」から、そうならないようにするため。「さるかしこき事」とは、「つもれる雪は氷りながら土をかいはなれてくえおつる。これを雪国には雪なだりといふなり。さる時は麓の家村をうもらし、柱梁などをさへうちたふし、あまたの人、これにうたれて死ぬること、年々にあなりといふ」。

【適宜訳し、語を補いつつ、まとめる】

〔解答例〕気温が上がると、積もっている雪が凍ったまま崩れ落ちる雪なだれが起きる恐れがあると知っているので、その危険を避けるため。(59字)

問4 傍線部Ⅱについて、何が、どのような状態であることを「黄泉下べ」に喩えているのか。簡潔に説明せよ。

〔参照箇所〕大路の雪は軒よりも高ければ、遙かに人屋を見下して大声を出し、「やどりせむ。借し給へ」といへば、黄泉下べより打ちあふぎて、「道の伴ひはいくたりにてさぶらふ」などいふ

▼「高いので、見下ろす／＼」ので仰ぎ見る」という対照に注目。雪は軒（人屋Ⅱ家）より高い。家は積もった雪より低い。旅人は、雪の上を歩いているが、家は雪の底にある。

〔解答例〕家の軒より高く積もっている雪の上を歩く人から、人家がまるで地下深くにあるように見えている状態。(47字)

問5 傍線部Ⅲはどういうことか。「さること」の内容を明らかにして、三〇字以内で説明せよ。

〔参照箇所〕「落間のすみに雁を三つと真鴨を二つなむ、かたまにふせてかひおけり」

「こはかかる旅人にたうべさせむかまへにや」といへば、

●「さること」Ⅱ雁を三つと真鴨を二つを飼っているのは、旅人に食べさせる準備だということ。

〔解答例〕旅人の食料として雁や真鴨を飼っているのではないということ。(29字)

◎問6 傍線部Ⅳについて、なぜこのように思ったのか。本文の内容に即して六〇字以内で説明せよ。

〔参照箇所〕▼「心」の現れているところ。「日頃は人をおそれて高く飛鳥なれども、さるときは其人をおもひ頼みて、かくちかづくがかなしく侍り。これも十日ばかり先のあら

しに、我家の外にくだりにけり。この隣にも、先の家にも、三四五つは落ちて侍るを、みな我ごとくにして、**稲をはませてかひてさむらふ**。やうやうのどけくならば、隣なるも先のも、これなるも、ともにして**放やらむと申しあはせてさむらふ**」とかたる」

現代文同様、☆なぜ↓どのように。どのように思っているのか、という問いに答える。筆者は、村人の、渡り鳥に対する思いやりに心動かされた。

〔解答例1〕空腹のまま嵐に遭い、人を頼って降りてきた渡り鳥たちをかわいそうに思い、稲を食べさせて世話をし、暖かくなったら逃がしてやろうとする、村人の思いやりに感動したから。(80字)

カットして、

〔解答例2〕嵐から逃げてきた渡り鳥をかわいそうに思い、稲を食べさせ、暖かくなったら逃がそうという、村人の思いやりに感動したから。(58字)

しかし村人は、旅人に「何まゐらせむものもなし」といういうほどであり、食べ物が豊富なわけではない。特に雪の季節の稲はきわめて貴重なものだっただろう。それを渡り鳥に食べさせているのは、空腹のまま命がけで旅する彼等の姿に強く共感するところが村人にもあったからだろう。必死で生きている自分たちの姿を重ねたかもしれない。筆者の感動の中には、そういうことも含まれると思われる。しかし、字数制限の中では、すべて入れることはできない。冊子の解答例は、「雪に閉ざされ人が食べ物に不自由する時」を入れて六十字に収めているが、なかなか難しいだろう。

【解答】

問1 (a) Ⅱどのようにして雪の深さが十丈(三〇メートル)余りだと量って知ったのか

(b) Ⅱ恐ろしいことを聞き知る人

(c) Ⅱ何も(食事として)差し上げるようなものもない

(d) Ⅱしだいに気候が穏やかになったら

問2 ①ⅡB ②ⅡF ③ⅡC ④ⅡD ⑤ⅡA

問3 日が高くなり気温が上がると雪や氷がとけて雪崩に遭遇するかもしれないので、巻き込まれて命を落とす危険を避けたいから。

問4 雪が家の軒の高さ以上に積もっているので、通りからは人家がまるで地下深くにあるかのように見えている状態。

問5 客人の食料として雁や真鴨を飼っているのではないということ。(29字)

問6 雪に閉ざされ人が食べ物に不自由する時に、迷い込んだ渡り鳥に稲を与え暖かくなれば放そうという村人のやさしさに感動したから。(80字)

〔C〕次の文章を読んで、後の問いに答えよ。〈首都大学東京〉

きさらぎ十日ばかり、※越の前の国板取といふあたりを旅行しけるに、雪いと高し。「この雪いかばかりの高さは侍る」と問ふに、「※十丈あまりなり」といふ。(B) いかにしてさは量りしれりとおもふに、常見の大木の末が、真柴などみるばかりに、雪のつもれるうへに余りて侍るをもて、そればかりの丈なりとはいふなり。

雪はおもしろき物にて、松の小枝にかかりたるあかつき、小竹群のうら葉にふりしく夕ぐれなどは、花にもまさりておもほゆるを、かくつもりたる山路にては、人の命をもとるべきものは雪なり。かまへてきさらぎばかりは、春のきざし下にめぐみて、かのつもれる雪は氷りながら土をかはなれてくえおつる。これを雪国には雪なだりといふなり。さる時は麓の※家村をうもらし、柱梁などをさへうちたふし、あまたの人、これにうたれて死ぬること、年々にあ①なりといふ。

さる(B) かしこき事をききしる人は、I やどりをばまだきに出て、氷の消ゆまじき時にあゆみ、日のさしのぼりてあたたけくなれば、さる高山の※常陰なら②ぬ所をもとめて、昼より先やどりを乞ふなり。またさるやどりをこふにも、大路の雪は軒よりも高ければ、遥かに人屋を見下して大声を出し、「やどりせ③む。借し給へ」といへば、II 黄泉下べより打ちあふぎて、「道の伴ひはいくたりにてさぶらふ」などいふを、「見給ふばかりの伴ひなり。借代はいくら参らすべき」と、又大声にいへば、「かかる雪の中の住居して侍るに、(C) 何まゐらせむものもなし。よきほどにしたまへ」といふさへかすかに聞こゆ。さて谷の底にはひ下るばかりに家の外に下りて、先火を乞ふにぞ、真柴はぬれにぬれて火つかず。烟は立ちこめて、いぶせき事いふかぎりなし。

さて、※落間のすみに雁を三つと真鴨を二つなむ、※かたまにふせてかひおけり。「こはかかる旅人にたうべさせむかまへ④にや」といへば、「III さることにあらず。彼らはよく時をしりてはべる鳥なれども、西南の国のはやく春づきし年は、時をたがへて、まだきに北国をさしてかへり来る故に、翼ありて空はゆけども、さすがに※八重山の雪のみを見つつ飛びこゆるに、とくだりて物はまむとすれども、野も岡も川もひた白にて、何はまむ所もなければ、飛びかへらむとしつつ、空にいざよふ時、かの雪国にはべる雪吹といふあらしの吹出て侍るに、天路まどひて、少しも人家のちかからむ所にとびくだりてやすらふなり。日頃は人をおそれ高く飛鳥なれども、さるときは其人をおもひ頼みて、かくちかづくがかなしく侍り。これも十日ばかり先のあらしに、我家の外にくだり⑤にけり。この隣にも、先の家にも、三四五つは落ちて侍る

- 5/8 -

を、みな我ごとくにして、稲をはませてかひてさむらふ。(D) やうやうのどけくならば、隣なるも先のもの、これなるも、ともにして放やらむと申しあはせてさむらふ」とかたる。IV よき心かなとはおぼえける。

(建部綾足『折々草』より)

※注 越の前の国板取Ⅱ現在の福井県南条郡南越前町板取。

十丈あまりⅡ三〇メートル余り。板取近辺は豪雪地帯。

家村Ⅱ家群。集落の意。

常陰Ⅱいつも日陰になつていて日の当たらない所。

落間Ⅱ土間。

かたまⅡ竹籠。

八重山Ⅱ幾重にも重なり合つた山々。

#### 【原文】

きさらぎ十日ばかり、越の前の国板取といふあたりを旅行しけるに、雪いと高し。「この雪いかばかりの高さは侍る」と問ふに、「十丈あまりなり」といふ。いかにしてさは量りしれりとおもふに、常見の大木の末が、真柴などみるばかりに、雪のつもれるうへに余りて侍るをもて、そればかりの丈なりとはいふなり。

雪はおもしろき物にて、松の小枝にかかりたるあかつき、小竹群のうら葉にふりしく夕ぐれなどは、花にもまさりておもほゆるを、かくつもりたる山路にては、人の命をもとるべきものは雪なり。かまへてきさらぎばかりは、春のきざし下にめぐみて、かのつもれる雪は氷りながら土をかはなれてくえおつる。これを雪国には雪なだりといふなり。さる時は麓の※家村をうもらし、柱梁などをさへうちたふし、あまたの人、これにうたれて死ぬること、年々にあなりといふ。

さるかしこき事をききしる人は、やどりをばまだきに出て、氷の消ゆまじき時にあゆみ、日のさしのぼりてあたたけくなれば、さる高山の常陰ならぬ所をもとめて、昼より先やどりを乞ふなり。またさるやどりをこふにも、大路の雪は軒よりも高ければ、遥かに人屋を見下して大声を出し、「やどりせむ。借し給へ」といへば、黄泉下べより打ちあふぎて、「道の伴ひはいくたりにてさぶらふ」などいふを、「見給ふばかりの伴ひなり。借代はいくら参らすべき」と、又大声にいへば、「かかる雪の中の住居して侍るに、何まゐらせむものもなし。よきほどにしたまへ」といふさへかすかに聞こ

ゆ。さて谷の底にはひ下るばかりに家の外に下りて、先火を乞ふにぞ、真柴はぬれにぬれて火つかず。烟は立ちこめて、いぶせき事いふかぎりなし。

さて、落間のすみに雁を三つと真鴨を二つなむ、かたまにふせてかひおけり。「こはかかる旅人にたうべさせむかまへにや」といへば、「さることにはあらず。彼らはよく時をしりてはべる鳥なれども、西南の国のはやく春づきし年は、時をたがへて、まだきに北国をさしてかへり来る故に、翼ありて空はゆけども、さすがに八重山の雪のみを見つつ飛びこゆるに、とくだりて物はまむとすれども、野も岡も川もひた白にて、何はまむ所もなければ、飛びかへらむとしつつ、空にいざよふ時、かの雪国にはべる雪吹といふあらしの吹出て待るに、天路まどひて、少しも人家のちからむ所にとびくだりてやすらふなり。日頃は人をおそれ高く飛鳥なれども、さるときは其人をおもひ頼みて、かくちかづくがかなしく侍り。これも十日ばかり先のあらしに、我家の外にくだりにけり。この隣にも、先の家にも、三四五つは落ちて待るを、みな我ごとくにして、稲をはませてかひてさむらふ。やうやうのどけくならば、隣なるも先のも、これなるも、ともにして放やらむと申しあはせてさむらふ」とかたる。よき心かなとはおぼえける。

（建部綾足『折々草』より）

問1 波線部（a）（d）を現代語に訳せ。

- （a）「  
（b）「  
（c）「  
（d）「

問2 傍線部①～⑤の助動詞の意味を次の中から一つ選んで記号で答えよ。

- A 完了 B 伝聞 C 意志  
D 断定 E 尊敬 F 打消  
①＝（ ） ②＝（ ） ③＝（ ）  
④＝（ ） ⑤＝（ ）

問3 傍線部Ⅰについて、そのようにする理由を簡潔に述べよ。

「目安」20字

問4 傍線部Ⅱについて、何が、どのような状態であることを「黄泉下べ」に喩えているのか。簡潔に説明せよ。

「目安」50字

問5 傍線部Ⅲはどういうことか。「さること」の内容を明らかにして、三〇字以内で説明せよ（句読点も字数に含める）。

◎問6 傍線部Ⅳについて、なぜこのように思ったのか。本文の内容に即して六〇字以内で説明せよ（句読点も字数に含める）。

【解答】

問1 （a）＝どのようなにして雪の深さが十丈（三〇メートル）余りだと量って知ったのか

（b）＝恐ろしいことを聞き知る人

（c）＝何も（食事として）差し上げるようなものもない

（d）＝しだいに気候が穏やかになったら

問2 ①＝B ②＝F ③＝C ④＝D ⑤＝A

問3 日が高くなり気温が上がると雪や氷がとけて雪崩に遭遇するかもしれないので、巻き込まれて命を落とす危険を避けたいから。

問4 雪が家の軒の高さ以上に積もっているので、通りからは人家がまるで地下深くにあるかのように見えている状態。

問5 客人の食料として雁や真鴨を飼っているのではないということ。（29字）

問6 雪に閉ざされ人が食べ物に不自由する時に、迷い込んだ渡り鳥に稲を与え暖かなれば放そうという村人のやさしさに感動したから。（26字）